

# オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析 ～BEVI を用いた測定結果に基づいて～

清藤隆春・橋本智

徳島大学高等教育研究センター

## 1. はじめに

徳島大学高等教育研究センターでは、グローバル人材育成を目的として、毎年夏休みと春休みを利用して、全学部学科の学生を海外の大学・教育機関に派遣しているが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で、2020年度は全ての海外留学プログラムを中止した。そこで、2020年度は米国の南イリノイ大学(以下、「SIU」)に相談を持ちかけ、オンライン留学プログラムを開発し、夏休みと春休みに実施した。

オンライン留学には一定の効果があることが明らかとなった<sup>1)</sup>ため、コロナ禍後にも継続したいと考えている。本稿では、夏休みと春休みのプログラム参加学生たちのグローバル人材としての能力(=グローバル・コンピテンシー)の傾向について、BEVIを用いて明らかにし、今後のオンライン留学プログラム開発の参考とする。

## 2. 研究方法

### (1) BEVI

短期留学の成果の評価等を目的に、学生の情動的・心理的変化の客観的な測定ができる「BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory)」というオンライン評価を導入する大学が増えている<sup>2)</sup>。基本情報(40項目)及び質問(185項目)から構成され、質問の選択肢は4段階で、統計的に対になっており最終的には9段階に分類される尺度もある。結果は、表1の通り、17のスケールで数値が表され、7つ(I～VII)の領域に分けられる。Aggregate Profileの結果を見ると、各スケールそれぞれ、全体平均値が100点満点で表されており、50点を平均としている。差を見る場合、5点以上出ると有意性があるとされる<sup>2)</sup>。

表1 BEVI スケール一覧

I 形成的指標	
スケール1	人生におけるネガティブな出来事
II 中核的欲求の充足度	
スケール2	欲求の抑圧
スケール3	欲求の充足度
スケール4	アイデンティティの拡散
III 不均衡の許容	
スケール5	基本的な開放性
スケール6	自分に対する確信
IV 批判的思考	
スケール7	基本的な決定論
スケール8	社会情動的一致
V 自己とのかかわり	
スケール9	身体的共鳴
スケール10	感情の調整
スケール11	自己認識
スケール12	意味の探究
VI 他者とのかかわり	
スケール13	宗教的伝統主義
スケール14	ジェンダー的伝統主義
スケール15	社会文化的オープン性
VII 世界とのかかわり	
スケール16	生態との共鳴
スケール17	世界との共鳴

### (2) 分析方法

本稿では紙面の都合上、上記の17のスケールの全てを扱うことはできない。そのため、このグローバル人材の定義<sup>3)</sup>の中でも、著者らが最も関心を持っている「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に大きく関連する項目である「スケール8」(社会情動的一致)と「スケール15」(社会文化的オープン性)の2つに絞り、プログラム開始前にBEVIを受検してもらい、その結果を分析を行うこととした。

### (3) 調査対象者

本調査の対象者は、夏休み参加学生27名、春休み参加学生14名の、合わせて41名である。

#### (4) 倫理的配慮

学生には、パソコンの画面上で趣旨、個人情報の取り扱いについて同意した上で、BEVI を受検させた。なお、BEVI では、個人は特定されない。

### 3. 分析結果および考察

図1は、夏休み参加学生と春休み参加学生がプログラム開始前に受検したBEVIの「スケール8」と「スケール15」の2つのAggregate Profileの数値である。縦軸はBEVIの数値(点)を表している。以下、スケールごとに結果を分析する。

#### (1) スケール8「社会情動的一致」

スケール8は、7つの領域のうち「IV 批判的思考」の領域に入っている。これは、自分だけでなく他者をよく理解し配慮ができる傾向を示す項目である。グローバル人材の育成においては、異文化の人へ配慮ができると同時に、自分自身と自文化への理解が深い学生を育成したい。その点で、この項目は重要なものの1つであるが、どちらの参加者も高い数値ではなく、さらに春休み参加者は夏休み参加者と比べて有意に低い。春休み参加者は、海外に関心はあるものの、他者に配慮して課題解決に取り組む複雑な思考を積極的に行わない傾向があると考えられるので、異文化交流をサポートする観点での学内プログラムを融合するなどの工夫がいと考えられる。

#### (2) スケール15「社会文化的オープン性」

スケール15は、7つの領域のうち、「VI 他者とのかかわり」の領域に入っている。社会や文化の様々な要素に興味や関心があり、その差異に気づくことができる特質を表すが、これはグローバル人材には不可避なものである。図1を見ると、夏休み参加者は春休み参加者に比べて有意に高く、80点以上ある。夏休み参加者は、元々異文化に強い関心があると考えられるので、SIUのオンラインだけの異文化体験だけでは満足せず、数値を更に伸ばすことは難しいと考えられる。オンライン留学に異文化間協働学習などの学内プログラムを融合させ、より深い学びの機会を提供する必要がある。

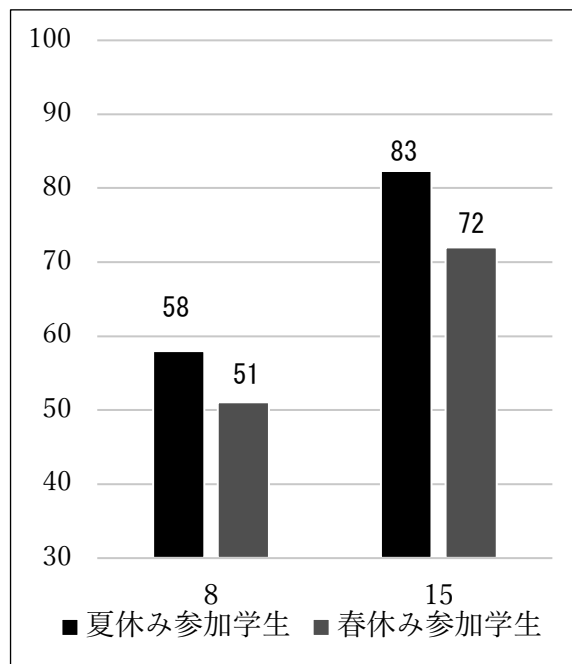


図1 参加学生のスケールの数値

#### 4. 今後の課題

2020年度 SIU オンライン留学の夏休みと春休みの参加者を比べると、夏休み参加者は、異文化に関心が高い傾向にあり、春休み参加者は、海外に関心はあるものの、他者理解をしながら課題解決に取り組む複雑な思考は積極的に行わない傾向があることも明らかとなった。2021年度以降の分析を継続し、オンライン留学および学内講義などとの融合プログラムの開発の参考とする。

#### 5. 参考文献

- 1) 清藤隆春・橋本智(2021)「BEVIを用いたオンライン留学の効果測定-コロナ禍でのグローバル人材育成の試み-」徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要: 12-21
- 2) 西谷元(2017). 留学効果の客観的測定・プログラムの質保証-The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j)-. 広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書. 137, 45-70
- 3) 文部科学省(2012). グローバル人材育成戦略. 8頁